

14 宋以前の傷寒論について

—朝鮮古医書「医方類聚」からの考察

牧角 和宏

日中両国において、「傷寒論」は通常「注解傷寒論」（成無己）およびその後発本（簡略本）を指す。注解傷寒論は宋板傷寒論の抜粋の注釈書なのであるから、本来宋板傷寒論に基づいた研究がなされてしかるべきであろうが、歴史的経緯により、今日まで宋板傷寒論（趙開美本）を用いた研究は少ない。

従来傷寒論研究において重視されてきたのは三陰三陽篇のみであり、弁脈法、平脈法、傷寒例はほとんど顧みられていない。不可篇に至っては膨大な削除が行われているため、注解傷寒論のみを研究対象とした場合、不可篇の存在意義すら認識できない。

三陰三陽篇において、宋板条文中の細字注記は注解傷寒論では削除されている。細字注記は林億らが校勘した

諸本の異論、異説を併記した重要な検討資料であるが、注解傷寒論ではこれらを知ることができない。

このような条件下にある注解傷寒論を用いて研究が行われてきたため、日中両国における傷寒論の基本的理解（定義）は、三陰三陰の流れに沿った「陽病では發汗吐下を行い、陰病では温裏法を用いる」治療医学書である、ということになるのか。

このように定義した場合、素問熱論や諸病源候論の傷寒概念（陽病発汗陰病吐下）は傷寒論とは異なった概念、ということになる。また、脈経巻七のような不可形式の傷寒論は垂流、ということになる。

さて、演者はすでに本学会において、宋板傷寒論（明趙開美本）と仲景書引用諸本（脈経、千金方、千金翼方、外臺秘要、太平聖恵方）との比較検討において、宋以前の傷寒論は不可形式で編纂されていた可能性が脈経巻七などから伺えること、三陰三陽篇については素問熱論に忠実な治療方針を論じた傷寒論が宋以前に存在し（太平聖恵方巻八および千金翼方巻九）、宋板傷寒論はこれらを細字注記の形で温存していることを考え合わせると、宋板は

素問に忠実な部分と行き過ぎた教条主義を戒めた条文との「ダブルスタンダード」で成り立ったテキストであると考えられることを論じてきた。

宋以前の医学書を伺い知る資料として李氏朝鮮の医学全書「医方類聚」がある。

「医方類聚」傷寒門は巻二十七より始まる。まず、運氣、弁脈、平脈、傷寒例の各編が傷寒論注解から引用されている。次に、諸病源候論が引用され、巻二十九には千金翼方巻十傷寒宜忌と太平聖恵方巻八、和剤指南などが引用されている。

ここで、太平聖恵方からは三陰三陽篇および不可篇のほぼ全文が引用されているのに対して、注解傷寒論からは三陰三陽篇、不可篇いづれも引用されておらず、千金翼方は傷寒宜忌（宋板の不可篇に相当）のみが引用されている。

「医方類聚」巻三十、傷寒門四には無求子活人書が引用されている。活人書巻第三の引用として「傷寒表證當汗裏證當下不易之法也」（十五問表裏兩證俱見）とある。

このように、当時朝鮮に渡来し、「医方類聚」に引用さ

れた傷寒論は多くが素問熱論に近い病態概念で構成されている。

注解傷寒論では、宋板傷寒論から細字注記と不可篇を大量に削除したために、素問熱論とは一見異なる病態概念が論じられる結果となっている。中国本土において太平聖恵方はあまりの大部故かほとんど用いられず、また宋板傷寒論もほとんど普及しなかったために、簡略化された注解傷寒論のみが脚光をあびたのであろうか。

一方、朝鮮においては太平聖恵方が重視され、他の宋以前の書物と併せ、素問熱論に近い傷寒概念が正統派とされ、注解傷寒論系統の記述はむしろ異端として排斥されていたのではなからうか。

以上より、宋以前には素問熱論系統の傷寒概念が主流であったことが推察された。

（北陸大学薬学部東洋医薬学教室）